古き伝統を現代へと受け継ぐ「中屋家」

300年以上燃え続ける「火さま」

のと鉄道能登中島駅から主要地方道富来中島線を通り、富来方面へと向かう。通行する車の数は次第に少なくなるが、自然豊かな山々が訪れる者を迎えてくれる。周囲を山に囲まれた中島町河内。そこには300年以上もの長きに渡り、一度も絶やすことなく代々受け継がれている「いろり火」が存在するのだという。

第21代当主、中屋幸正さん(82)と妻の好子さん(74)が出迎えてくれた。「正確に記したものはないので、はっきりとした年月はわからない」と幸正さんは話すが、中屋家では、いろり火は家の守り神と考えられており、代々「火さま」と呼び、大切に守り続けてきた。普段は灰の中に隠れているため、単にいろりがあるだけに見える。話をしながら、幸正さんが火ばしを使ってササッと灰を掻き分ける。それと同時に木がくべられると、勢いよく火が40～50センチほど燃え上がる。興味深く眺め込んでいた顔がいろり火で火照り、昨今の暖房とは違う温かみを感じた。

幸正さんは、10年前に母親が亡くなって以来、一日も欠かすことなく「火さま」との会話を続けている。毎日新しい木を足さなければ火が消えてしまうのだという。

「口能登型」間取りを今に伝える住宅

「火さま」の話を聞くうちに、中屋家には古き伝統を現代へと伝えるいくつもの足跡が残っていることがわかってきた。

いろりから天井を見上げると、黒光りした太く大きな梁、仏間の続き部屋の中央にある柱の跡、土のままになっている土間など興味深いものが多い(建物の詳細は、次ページの「建物鑑定」福井工業大学市川准教授の解説を参照)。

仏間との続き部屋には、中央付近に建物の特徴である柱があった（今はない）

訪れる者を圧倒する黒光りした太く大きな梁

今でも作業場として使われている土のままの土間

生活様式の変化と「火」

その昔、いろりを中心とした生活は決して珍しいものではなく、どの家庭でも、炊事、風呂、暖房などに火が使われ、生活には欠かせないものであった。それが電気やガスなどの登場により、火そのものの役割が大きく変わった。それとともにいろりもその役割を終え、その姿を見ることは少なくなった。

家族がいろりを中心に集まる。そこには家族の絆があり、家族が心を交わすかけがいのない場所だったに違いない。さらには近所の人たちや親戚が集まり、たくさんの情報が交わされていたことであろう。「最近ではそんなこともほとんどなくなって、周りのことが何にもわからんがになった」と寂しそうに話す幸正さんのひと言が心に残った。

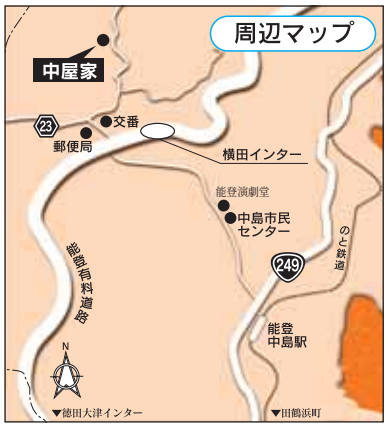
伝統・文化を次代へつなぐ

中屋さんの3人の子どもたちは東京と金沢で別々に暮らしているという。今のところ「火さま」を継ぐ人のめどは立っておらず、中屋家で守り続けられてきた火が消えようとしている。

今回の取材で伝統や文化を守り続けることの難しさを改めて知らされた。農山村地域が抱える過疎化問題。過疎に苦しむ地域がこれからいかにして生き残っていくのか、真剣に考えなくてはならない時期にきていることだけは間違いなさそうである。

平成16年10月の市町合併以来、4年余りにわたって掲載してきた「ななおの彩り」は今月号（50回）をもって終了させていただくこととなりました（今後は不定期な掲載となります）。七尾にはこんなにも素晴らしい人・もの・場所があることを知っていただけたのではないでしょうか。これからも「ふるさと七尾」をいつまでも守り続けていきたいものです。

これまで取材に協力していただいた多くの方々、そして表紙の撮影およびアドバイザーとして昼夜を問わずご協力いただいた写真家の間蔵さんに、紙面をお借りして心から御礼申し上げます。



中屋　好子さん（74）

22歳の時にこの家に嫁いできたが、しばらくは「火さま」のある生活に慣れず、火が消えていないか気になって、田んぼ仕事から帰って来ることもしょちゅうありました。もともと頑固な家系なのか、「火さま」に関して、子どもたちを厳しくしかる姿を何度も見てきました。いろりを囲んでにぎやかだった頃が今では懐かしく思います。

建物鑑定

福井工業大学准教授
工学博士
市川　秀和さん

当住宅は、梁間４間半・桁行８間の規模で、合掌組入母屋造の瓦葺き（もとは茅葺き）であり、明治以降の増改築はあるものの、保存状態は極めて良好です。

中島町藤瀬の座主家住宅（国指定重要文化財）よりも少し規模が大きいものの、間取りは全く同じであり、「口能登型」間取りの古式を今に伝えています。

建築年代は、座主家に続く古さと推定され、江戸時代後期始めと考えられ、築２００年以上でしょう。

座主家を口能登地域の最も古い民家と位置づけたとき、その後の民家の変容を探究する上で、中屋家住宅は学術的に重要なのです。

仏間の続き座敷の中央に柱があり、根源的・閉鎖的な間取りの古式を物語っている（柱は現在無い）。能登の民家の歴史的変容過程を探究する上で、注目に値する場所とは「仏間」であることから、能登の浄土真宗など近世的布教実態との関わりが重要であり、その糸口を中屋家住宅から見い出すことが出来るかも知れません（今後の詳細な調査が必要）。

中屋家住宅の建つ河内地区が、もともと富来に属していた土地柄を考慮することも、この住宅の特色をさらに深める上で大切です。